あがたぎの森

「おや、まあ、おばあさん。孫さんの手ひいて、どこへ行きなさったね。」

「ええ。この子に、できもんが出来て、いたがるもんで、あがたぎさまへ、お酒を持ってお参りしてきましたわ。」

「まあまあ、そうかね。遠いのによう行きなさった。早うできもんを治していただきますように……。」

いねをたばねていた手を休めると、きくおばさんは、あがたぎの森に向かって、手を合わせました。

「あしたは、きっと、ようなるにちがいない。あがたぎさんは、ありがたい神さんじゃからなあ。さあ、気をつけて帰りなされや。」

夕日に赤くそまった田んぼ道を、おばあさんと孫は、にこにこしながら、帰っていきます。

「あがたぎ」は、こんもりとした、小さな森で、木や竹がみごとにおいしげっていました。この森は、村の先祖様がおりてきて住みつかれた所で、村人を守ってくれる森だと言われています。

そのうえ、この森には、できものを治してくださる神様がいるのです。

長雨が続いて、川にかけてあった丸木の橋が、大水で流れてしまったときのことです。村の人たちは、新しい橋をかけるために、近くの山で木をさがしましたが、てきとうな木が見つかりません。

こんなときには、つい、あがたぎの森の、あの、みごとな木が頭にうかびます。

「一本だけ、いただこうじゃないか。村のために使うのだから。」

「そうだな。村の守り神様だもの。ゆるしてくださるにちがいない。」
「あがたぎさま、このりっぱな木を一本いただきます。」
「おかげで、いい橋がかけられます。ありがとうございました。」
お礼を言いながら、そっと、一本、切ってきたのでした。
ところが、次の日、森の木を切った人たちみんなが、いたいできものになやまされてしまったのです。
「こりゃあ、やっぱり、あがたぎさまの、おしかりじゃ。早う、おわびをして、できものを治していただこう…。」
と、酒どっくりをかかえて、あがたぎの森にかけつけました。
「あがたぎさま。大切な森の木を切って申しわけないことをしました。」

「どうか、このできものを治してください。お願いでございます。」
森の中を、ぐるりとひと回りしながら、何ばいも何ばいも、お酒をついで、森の神様にさし上げ、できものを治していただいたのでした。

今日も、秋晴れのよい天気です。村中がいねかりで大いそがしです。
「おや、六兵衛さんが、大どっくりさげて、あがたぎさんの方へ行きなさるが、だれぞ、家の者にできもんが出来たんかのう。」
「いや、なんでも、きのう、六さんは、いねをほすさお竹が一本足りないもんで、こそっと、あがたぎさまの竹をもらってきたんじゃと。そしたら、けさは、かゆいできもんがぼろぼろと出たんじゃそうな。それで、おわびに行くのじゃろう。」
ばつが悪そうに、小走りにかけていく六兵衛さんの後ろすがたを見送りながら、信助さんと五作さんは、あがたぎの森に手を合わせ、また、仕事にせいを出します。

子どもたちは、あがたぎの森で、くりを拾い、木によじのぼって、元気に遊んでいます。